

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 90 号

平成 21 年 10 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-お 912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第一部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス）より（5）

10月1日

人生を強く堪え抜くには次の二つの道がある。その一つは、世の狼どもと一緒に咆え、目の前にありながら万人に行きわたらない生の享樂の分け前を得ようと猛然と噛み合う生き方である。これは一般に行われている生活であり唯物主義のいわゆる「生存競争」である。もう一つは、神との本当の、誠実な、しかも喜びにみちた交わりにまで精神を高めることによって生きる道である。神との交わりを持つ者には、生存競争は不用になり、また憂愁や無気力は心に生じえない。

この二つの中間にある生き方は、つねに、足りないだらけの結果しか生じない。…神と、しかも同時に世間と、たえず戦うことによって彼らは多くの力をあまりに早くすりへらす。それにもかかわらず、今日ではこれが、悪人にもなりきれず、断固として強く善人にもなろうとしない人類の大部分の生活である。ダンテはこういう人たちを「地獄の入口」に置いた。これは、彼ら自身の心の不安と、両方の力強い仲間からの軽蔑に悩む、不断の陰鬱な状態をさすのである。…

どんなことがあろうと、せめてこんな人たちの仲間入りだけはないように、急いで断固たる決心をなささい。

10月2日

人生において、なによりもまず知らなければならないのは、自分が何を本当になしとげたいかである。そしてついにそれを知りえたなら（そのために人は通常、生涯の半ば以上をついやす）、この目標とともに手段をも得ようとしなければならない。

だから、たとえば、神に身を委ね、そして神によろこばれる人（これが、クリスチャンという言葉を一一般にわかりやすく言いかえたものである）になりたいと思うなら、苦難をも望まねばならない。そして、人間の自然のままの心が求める、絶えまない安逸の享樂を願ってはならない。こういう種類の苦難は決してやたらにたくさん来るものではなく、また、神との間が真にゆるぎないものとなれば、心配も絶望もつねになくなるので、多くのことに堪えることができる。

自分の才能を高め、老年にいたるまで保っていたいと願うなら、多くの善事をなさねばならない。これが最も確かな方法である。

正しい活動をするには、より完全な人になるよりほかなく、より完全な人になるには、善事に習熟するよりほかはない。単なる知識や思索だけでは、だめである。

10月20日

私はキリスト教を、最初はむしろいくらか実際的に、それも軍務から類推して理解していた。そこで、私に一番興味のある聖徒は、ペテロやパウロではなくて、カペナウムの町の百卒長（ルカ7・1-10）や百卒長コルネリオ（使徒行伝10・1-48）であった。そのかぎりにおいて「救世軍」は、現代の要求を、そしてある程度まであらゆる時代の要求をも、本能的に正しく把握していると、私は信じる。

この地上の生活は、われわれの平常の気分が必然的に忍耐を要求するように出来ている。しかし、一旦その時が来たなら、敏捷と元氣（エネルギー）をもって行動することができなくてはならない。哀歌3・22-33。

10月22日

神は霊であるから、礼拝するものも、霊とまことをもって礼拝すべきである。(ヨハネ4・24)

そしてイエスは言われた、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、私にくることが出来ないと、言ったのである。」

(ヨハネ6・65)

そこでイエスは言われた「わたしがこの世に来たのは、さばくためである。すなわち、見えない人が見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである。」(ヨハネ9・39)

イエスは彼に言われた、「私は道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとにいくことはできない。」(ヨハネ14・6)

しかしみたまの実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。(ガラテヤ書5・22)

あなた方はみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。(ガラテヤ書3・26)

ヨハネによる福音書4の24、6の65、9の39、14の6について。われわれは、この世の生活では、神が何であるかを知ることが出来ない、同様に、キリストや聖霊が何であるかも知ることが出来ない。これについて教理問答書や教理教本に書いてあるすべてのことは、要するに、多少とも正しい構想力をもった人間の観念の所産にすぎない。それゆえ、多くの人々は、彼らより毛すじほども多くは知っていない教会の教師のだれかれの見解を聞いてもよく理解できないので、神やキリストや聖霊の存在のことなど放り出さざるをえなかった。もしわれわれが神の確かな存在について、キリストへの信仰の力について、また、われわれの霊とは異なった霊の光の本性について、われわれ自身の経験をもっていなければ、そのような人間的な教条についての死んだ教會的信仰以外のものを持つことは出来ないだろう。実際、いつの時代にも、多くの人々の信仰は

そのようなものであったし、今もなおそうである。…

聖霊は、その他の点ではまことにすぐれた多くのキリスト者にとっても、またなじめないものであり、いくらか怖い、ほとんど不気味なものではあるが、これはつねに見張りをおこたらぬ生きた真理の霊であって、真実あるがままに人間や事物を見るものである。すべての人間関係にまつわる全くの嘘、あるいは半ばの虚偽から脱け出るために、われわれはこの霊を授からねばならない。

しかし、この霊を宿した人のうちで、それがどんな実を結ぶかについて、あなたみずからがパウロのガラテヤ人への手紙5の22を参照し、それにしたがって、この霊があなたや他の人の内にすでに宿しているかどうかを、容易に判断することができる。そして、たとえその霊の宿りが、まだ十分強くないか、あるいは弱いかであっても、やはりそのために、あなたはすでに「神の子」であり、確かな善い道を歩いているのである。そのことを使徒は、同じ手紙3の26で、欠点の多いガラテヤ人に向かって述べている。それはわれわれにとっても、心が弱まったときの大きななぐさめである。

10月23日

朝、眼がさめてすぐ、今日もまた自分が負わねばならぬ十字架のことを思うと、それが自分にはあまりにも重いように思われることがしばしばあろう。また、その日に、さらに将来に、どんなことが一体起るかを想像すると、すべての感情のうちで最も不愉快な恐怖感に容易におそわれることがあろう。

しかし、今日もわれわれを目ざめてくださった神の恩寵を思い、また神の国のために果たすべき奉仕について考えるならば、活動的な人間は、そのために自分がなすことができ、かつ許されている事柄を心に描いて、喜びの感情がわき起り、それが一日中持続するであろう。

10月31日

もしあなたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少しもなければ、ちょうど、あかりが輝いてあなたを照するときのように、全身が明るくなるであろう。(ルカ 11・36)

ルカによる福音書11の36について。われわれに起る最もよいかつ最も決定的な事柄は、つねに電光(いなずま)のような性質をおびるものである。それは恩寵の光線であり、別世界から来る光の輝きであって、たいてい、真理の洞察を与えるばかりでなく、同時に積極的な行為への励ましでもある。そのとき、すばやく決意して、すぐさま実行するのが、人間のなすべき務めである。そうでないと、恩寵の閃光はすぐ消え去ってしまう。しかし、われわれが決心すると、それはまるで金の翼を持った鷲のように、普通には越えがたい障害をも飛びこえて、猛然とわれわれを高く連れのぼっていく。天国への道は、普通の学修の法則では全く計れない、きわめて独特な道である。それを経験したことのない者は、だれも信じようとはしない。

11月6日

実に理解しにくいことではあるが、しかし一旦それを理解すると、われわれの思考全体がそれによって大きな影響を与えられるのは次のような考え方である、すなわち、いきいきとした幸福感は、つねにただ新しい仕事や労苦、新しい悲しみを迎えるための元気づけや準備となるものであり(クロムウェルのいわゆる報酬の前払い)一方、つらい試練や意気消沈はいつも新しい、より大きな浄福と神の力とが加えられるための入口だということである。これが分れば、不幸に出会っても落着きを失わずに、幸福であってもまじめで思慮深くなる。

11月5日

だから、あなた方は自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているものである。神の御旨を行なって約束のものを受けするため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。

「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。

しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得るものである。（ヘブル人への手紙 10.35 - 39）

信仰については実にたくさんの本が書かれていることを、私も知っている。けれども、ヘブル人への手紙 10 の 35 - 39 と、それに続くすばらしい第 11 章に含まれているもの以上にすぐれたことは、いまだかつて述べられたことがない。

ここに言われているのは、今日もなお存在する二つの型の人間の違いである、すなわち、そのような確固たる信仰を持ち、どんな事情のもとでもそれを堅持する人と、目に見えるものだけを信じ、それに従ってやっていく利口な人との相違である。この世には、信仰の道よりほかに完全に満足を与えるものがないことをはっきり悟った時に、信仰はゆるぎないものとなる。

11月10日

心に起る善への促しも、悪へのいざないも、たいてい刹那的な閃きである。前者に対しては、即座にこれに応じて、われわれを助けようとさしのべられた手を、実行によってつかまねばならない。後者に対しては、同じように即座に、断固たる意志を持って抵抗しなければならぬ。「かくて星にまで登ることができる」(ヴェルギリウス)のである。

11月12日

無気力と傲慢(これはほとぼしり出るほどの自負心と活力感である)とは、いずれも悪の霊によるものである。あなたが自分のうちにそれを気づいたならば、それがはびこらぬうちにすぐ断固としてそれから遠ざかるがよい。

神から与えられた心情、それゆえ、できるだけつねに持ちつづけねばならない心情というのは、自分の弱さを自覚しながらも、なお、われわれをしてすべての行動と苦難に耐えさせる神の愛と力とにすっかり信頼しきった、おだやかな感情のことである。これこそ、精神的健康であって、単なる弱気や熱病的興奮とは反対のものである。

11月15日

よくよくあなた方に言うておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分から何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。(ヨハネ5・19)

わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それはわたし自身の考えでするのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである。」(ヨハネ5・30)

真の知恵がどこから与えられるのか他に知るすべがない場合でも、ヨハネによる福音書5の19,30の言葉がそれを教えてくれるに違いない。キリストでさえこのような定めに従われたのに、われわれがどうしてキリストと同じ知恵の泉を訪れないで、われわれ自身のうちから知恵を得ようとしたり、世間の知恵の学校でそれを学ぼうという大それたことをするのだろうか。しかもこの同じ知恵の泉はわれわれにも開かれており、この泉についての明らかな証拠をわれわれはキリストの言葉や行いのうちに見ることができるのである。ヨハネによる福音書7の15-18,6の63,68、マタイによる福音書7の29。

11月18日

われわれは真の内的生活を犠牲にするのでなければ、外部の敵からのがれることができない。それどころか、キリストの教団の活動的な一員になり始めた者にとって、敵がかえってふえることが多い。だからこそ、われわれは勇気と内的平和を祈り求めねばならない。これ以外のすべてのことは、われわれに何の役にも立たない。この場合に、大きな慰めとなるだけでなく、見えざるものに対する信仰をも一層強めてくれるのは、これら（勇気と内的平和）を護る力でさえ、しばしば明らかにわれわれの霊とは全く異なった霊から与えられるということである。そこでわれわれは、時には不幸のさなかでありながら、世にいう仕合せの中にあるよりも、かえって幸福であり、喜びに満たされるほどである、これが、見えざる世界の実在についての否定しがたい、まことの証明である。

11月22日

すべて主の命令をおこなうこの地のへりくだるものよ、主をもとめよ。正義をもとめよ。謙遜をもとめよ。（ゼパニヤ書 2・3）

神の恩寵によって高められるときには、いつもまちがいなく、人間による屈辱か侮辱がそれに先立つ。このことは、全く確かな前兆である。われわれは自分の持っている価値が、人間の善意か悪意かによって与えられるものではなくて、神の摂理によって授けられるものだということを、はっきり悟り、これに従って行動すべきである。

だから、そのように神によって高められることは、われわれを謙遜にするが、ごうまんにはしない。またそのような侮辱はかえってわれわれの心を堅固にし、確信を強めるものである。世の常の成りゆきとは正反対である。

ミカ書 7 の 8 - 10、ゼパニヤ書 2 の 3、ハバクク書 2 の 4、3 の 16・18・19、エゼキエル書 34 の 24 - 27、イザヤ書 43 の 11 - 13、46 の 11。

1 1月28日

仕事をするときは、いつでも、まず第一に、もっとも必要なことをこなさい。元気よく、そしてその仕事の主要点から着手しなさい。これが多くの仕事のために時間を得る手段である。それとほとんど同じようによい、第2の手段は、不必要な仕事や努力をすべて避けることである。

それから次に、生涯の晩(おそ)くならない時期に、享樂とか交際上のお務めと呼ばれる、あの実に無用なことをやめることができれば、無理な努力をしなくても、健康を十分維持しながら、普通の人の2倍も3倍もの量の仕事を引き受けることができる。

1 2月1日

永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストを知ることでありませう。(ヨハネ 17・3)

わたしの父のみこころは、子を見て信じるものが、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであらう。(ヨハネ 6・40)

老年期の始まるころのある日、一度過去に決まりをつけなければならぬ。怒りもなく、後悔の思いもなく、過去の帳簿を閉じて、もはやそれを開けてはならぬ。過ぎ去ったすべてのよいことに感謝しなさい。とりわけ、万事がよい結末に到達したことを感謝しなさい。最後に、実にたくさんのことがもう起る必要がなく、永久に片付いてしまったことに感謝しなさい。そうしたら、これまでの生活とはまるで違う「永遠」の命に向かって進みなさい。これに入るための条件は、ヨハネによる福音書 17 の 3 と 6 の 40 にしるされている。前途の展望は、これからさき限りないものである。